

1 事務局ヒアリングについて

- 第1回検討会議後、事務局において、屋内スケート施設のあり方や現状（ライフスタイル、練習環境）等について、競技関係者に関わらず県内の若者等（高校生・大学生、子育て中の女性）などを中心にヒアリングを実施。

【ヒアリングの概要】

① 実施期間

- ・ 令和4年7月～12月中旬（対面またはオンラインで実施）

② ヒアリング対象者

- ・ 県内高校生、大学生、子育て中の女性
- ・ 学識者、行政機関（先進自治体）
- ・ オリンピアン、スピードスケート部、アイスホッケー部
などを対象として、約100名に実施

【意見の概要】

（1）若者等の視点

① （人口減少時代における）施設整備について

- ・ 人口減少時代にあっても、必要な施設は必要。ただし、必要かどうかは、「山形の未来の子どもたちのためになるかどうか」で考えてほしい。
- ・ いわゆるハコモノを造ってはだめということではないが、一部の人のための施設ではなく、多くの県民に利益が及ぶ施設ならよい。
- ・ 施設を作るなら交通手段が便利なところを考えるべき。加えてリピーターを増やす仕組みが必要。
- ・ 新しい施設を全く整備しないのでは、古い施設ばかりになる。若者が利用しやすい施設を考えてほしい。

② スポーツ（スケート）に対する認識等について

- ・ 小さい頃の環境として、施設に行きやすかったり家族や友達、周囲の人がしていたり、そのスポーツに触れやすい環境であること、触れるハードルが低いことが、その後携わったり、馴染んだりすることに大きく影響する。ハードルを低くすることがスポーツの普及・振興につながる。
※ 北海道十勝エリアでは、冬になると親を含む地域の人たちが小学校の校庭に水を撒いて手作りのスケートリンクを作り、体育の授業はそこでのスケートになる。クラスの全員がスケート経験者になる。
- ・ 子どもの頃の遊びが外遊びではなく、スマホやゲームになっており、友達とスポーツを楽しむ機会も減っている。若い人に魅力があり楽しい施設があればよい。
- ・ スケートを子どもがやりたいと言えば習い事としてもやらせてあげたいが、施設を含めた環境などのハードルが低くなければ難しい。

- ・ 高校でスケート授業をしてくれることは貴重な機会であり良い経験になる。初めて体験するハードルが下がる。
- ・ 高校でわざわざ施設まで移動してスケートの授業をしなくてもよい。未経験者には危なそう。山形ならスキー授業にしてもらいたい。
- ・ スケートは高齢者がやらないので、利用者が限られそう。はじめだけ盛り上がって数年で人がいなくなりそう。
- ・ 最近スマホ等に費やす時間、いわゆるスクリーンタイムが日によっては10時間以上と大幅に増えており、余暇としてスポーツに費やす時間がなくなっている。また、コロナ禍の影響等もあり、体を動かそうとしても十分な環境がないため、若者のスポーツ離れが進んでいるのではないか。
- ・ 健康維持にスポーツは不可欠であると考えられるため、気軽に運動ができる施設等があればよい。

③ 山形に対するイメージ等について

- ・ 山形は、「何もない、何もなくて不便な田舎」、「山形駅周辺でも今風の（かっこいい、おしゃれな）施設・建物はない」、「活気がない」イメージで、県外へ出たいという希望につながっている。イメージを変えないと変わらない。
- ・ 山形はスケート施設だけではなくスポーツ施設が少ない。合わせて、レジャー施設も少なく、ライブハウスのようなエンターティメント性のある施設もない。
- ・ 山形は、幼少期の子どもが遊ぶ施設は充実しているが、小学生以降になると遊べる施設は少なくなる。

(2) 学識者、行政機関の視点

- 検討していくために主眼をどこに置くかが重要。そのうえで施設の規模等を検討していくことが必要。
- 他の事例をみれば、スケートリンク単体より、汎用性を利かせたものも検討してみてはどうか。単体で残すことは難しいので、多機能で考えられないか。できるだけ施設を増やさないよう、1つの施設で多様な使い方ができるようなやり方がよい。
- 骨太の方針の新しい資本主義では、官民連携にも注力していくこととされている。PFIだけではなく、様々な整備手法が出てきている。

(3) 競技関係者の視点

① スピードスケート関係

- ・ 400mトラックの中地を30m×60mのリンクとするいわゆるダブルリンクや、中地を全面氷とするパターンなど、様々な整備手法がある。

- ・ 選手目線では、陸上の練習もやっているため、利用者数や維持費の観点からも、通年のリンクが必ずしも必要というわけではないと考える。
- ・ 山形のスケート人口が少ないことについては、スケート部が少ないことも要因。北海道ではスケートだけではなく、夏は野球等をやりながら冬はスケートといったパターンもある。

② フィギュアスケート関係

- ・ スケート教室や指導員講習会から、スケート機会や、選手、関係者を拡大していくことが必要。
- ・ スケート施設は、氷の温度管理、冷凍機の設備管理を要し、その特性等について十分に理解したうえで、施設の設備や運営を考えるべき。
- ・ 選手の負担を抑えて、希望する人は誰でもスケートができるような環境が望ましい。

③ アイスホッケー関係

- ・ 県内にリンクがあったときは、社会人や大学のチームの練習に、子どもを含む初心者が加わって、競技者が拡大していった。県内にリンクができれば競技人口が戻ると期待される。
- ・ 他の施設では、イベントなど多目的に利用できるように、天井が高く、窓もあった。それでは、氷の維持費が高くなってしまう。観客席は、プロを呼ぶなら必要だが、活動するだけならそこまで必要性はない。施設の維持にはコスト意識が重要。
- ・ 子どもの頃からやっていたら滑れるようになるし、平衡感覚を養うこともできる。

④ カーリング関係

- ・ オリンピックで盛り上がり、興味を持った方から問い合わせがあっても、県外で練習することを伝えると諦めてしまう。
- ・ 子ども達や女性がせっかく興味を持って、施設がないということで、きっかけを失ってしまうことは残念である。

2 利用者数見込み（新潟市との人口規模比較による粗い試算）

○ 「新潟市アイスアリーナ」の利用実績及び新潟市の人口規模から、本県における利用者の見込みを試算

① 参考指標

ア 新潟市アイスアリーナの利用実績

- ・ 118,358 人（コロナ禍前の平成 30 年度の実績を採用）

イ 新潟市の人口及び面積

- ・ 794,674 人（平成 30 年 4 月時点）／726.4k m²

② 粗い試算

<パターン 1：本県人口との比較>

ア 山形県の人口及び面積

- ・ 1,040,971 人（令和 4 年 10 月時点）／9,323.15k m²

イ 利用者見込み試算

$$\begin{aligned} \rightarrow & 118,358 \text{ 人} \times 1,040,971 \text{ 人} \div 794,674 \text{ 人} \\ & = \underline{\underline{\text{県全体の年間利用者見込み 155,041 人}}} \end{aligned}$$

<パターン 2：県庁所在地人口との比較>

ア 山形市の人口及び面積

- ・ 244,381 人（令和 4 年 10 月時点）／381.3k m²

イ 利用者見込み試算

$$\begin{aligned} \rightarrow & 118,358 \text{ 人} \times 244,381 \text{ 人} \div 794,674 \text{ 人} \\ & = \underline{\underline{\text{県庁所在地の年間利用者見込み 36,397 人}}} \end{aligned}$$

3 競技団体において考える利用パターン

- 各競技団体において本県に屋内スケート施設が整備された場合の利用パターンの見込みを検討 ※競技団体間の調整は行っていない

【県スケート連盟】

	日	月	火	水	木	金	土	
7時～9時	練習						練習	
一般営業	教室	午後 教室（週2回程度）						教室
18時～21時		練習	練習 （貸切）	練習	練習	練習 （貸切）		

- ・ 練習：週4回は貸切、教室：平日及び土日に随時実施
- ・ 大会：県内大会の実施、全日本及び世界大会を誘致
- ・ その他：全日本チームの合宿を誘致

【県アイスホッケー連盟】

	日	月	火	水	木	金	土
7時～9時	中学						小学
一般営業	教室、 体験会						教室、 体験会
18時～20時	高校	小学		中学	高校	大学	
20時～22時	社会	大学		大学	社会	社会	

- ・ 練習：小中高／各週2回、大学生／週3回、社会人（3チーム）／週1回
- ・ 教室：体験会：月1回程度、大会：年3～4回

【県カーリング協会】

	日	月	火	水	木	金	土
7時～9時							
一般営業	教室						教室
18時～20時			教室	練習	教室	練習	練習
20時～22時							

- ・ 練習及びリーグ戦の実施：週3回
- ・ カーリング教室：週4回（平日：大学・社会人／土日：児童・小中高）
- ・ 東北大会：年2回程度／全国大会：年1回程度